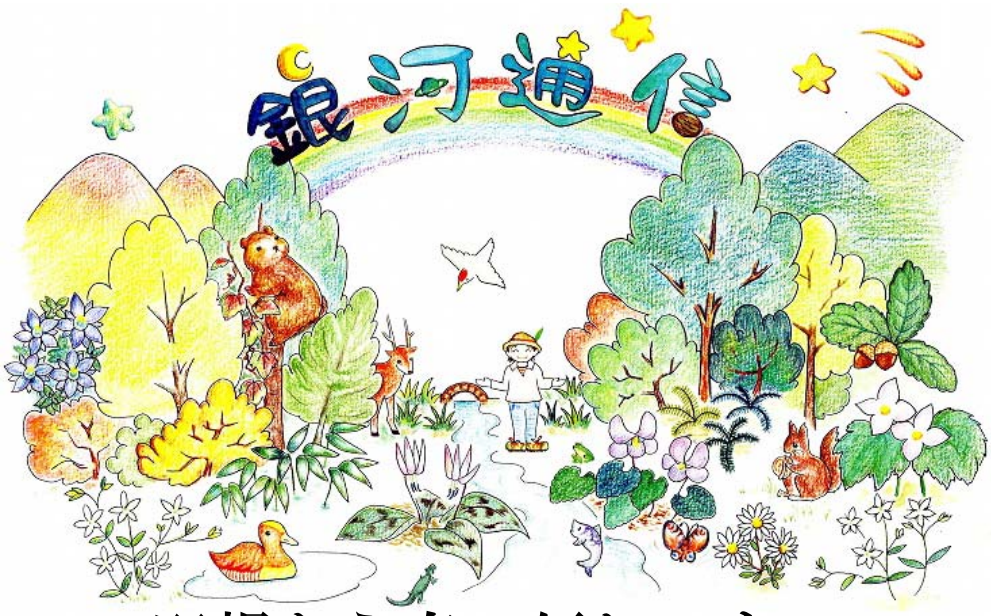


2012.4.5

No.171

編集・発行人　樋口みな子

E-mail minginga@agate.plala.or.jp
web配信希望はメールでご連絡ください。
郵便振替「銀河通信」
02740－7－56535
（郵送6号分1,000円）

野幌から春の便りです

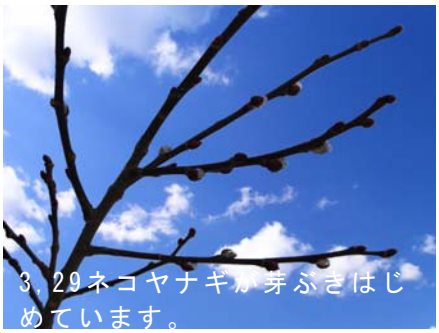
4月になったのに、我が家の周りはまだ雪景色です。寒い冬でしたが春の日差しが温かく感じられるようになりましたね。

３月も終わりに近づいたある日、春を探しに久しぶりに野幌森林公園を歩いて来ました。雪解けが遅く、南斜面にもふきのとうはまだ芽を出していませんでしたが、首が痛くなるほど高い木々を双眼鏡で見上げると、シジュウカラやコガラ、ヒヨドリなどが、日向ぼっこをしているようでした。コゲラのドラミングも聞こえて、春の森は静かな中にも命の躍動感があふれていました。

数日後、やっぱり山の空気が吸いたくて友人と馬追丘陵をショートスキーで歩きました。長沼スキー場裏から登っていくと広々とした空知平野が眼下にあり、空気が美味しかったです。ネコヤナギが白く芽ぶいていました。空気が美味しいと感じられることが、どんなにかけがえのないことかと、原発事故で、いつも不安に脅えながら暮らしている福島の人々に思いをはせました。

今、震災の瓦礫を各地で受け入れようという動きが活発です。私も地下街を歩いていたときに、テレビ取材で「瓦礫の受け入れをどう思いますか？」と訊ねられました。「放射能汚染の心配があり反対です」と答えると、さらに「東北支援や絆についてどう思いますか」とたたみ掛けられました。「困っている人たちを助けないのは、人間として良心が痛まないのか？」と言われたように思いました。東北は空き地も多くあり、瓦礫置き場は生活の支障にならない所にあると聞きます。また海岸に埋め立てて山を作りそこに木を植えて防潮林にしようという案も出ているそうです。絆の大合唱で受け入れないのは許せないという風潮には疑問を覚えます。北海道は、放射能汚染から避難してきた人たちを受け入れ安全な食べ物と安心できる環境を提供することこそが被災地支援につながると思います。

春の空に気持ちよさそうに
枝を広げて


3,29ネコヤナギが芽ぶきはじめています。

先日、小さなお子さんを育てている若い女性が廃炉の会の事務所に来てくれました。「瓦礫は持ってきて欲しくない。放射能のことを知るほどに、子供の健康が心配です」。と語りました。膨大な瓦礫の安全性を確認するのは困難だと思います。受け入れを拒否している札幌市長を応援したいです。

福井県の大飯原発の再稼働が先送りという記事がありました。京都府や滋賀県知事が再稼働に強く反対しています。「行政上の境はあっても大気はつながっている」と猛反論した嘉田知事に共感しました。天声人語は、鉱毒事件を告発し、民衆の先頭で闘った田中正造の言葉を紹介しています。「真の文明は山を荒らさず、河を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし」と。その卓見に感動しました。便利、快適が文明と思いこまされて生きてきたけれどそのツケは大きなものでした。何より、命が大事だから原発なしで暮らしたいです。5月5日、稼働している最後の泊原発３号炉の運転が停止します。そのまま廃炉にしたいです。

3,29 馬追丘陵から空知平野を望む

いのちをつなぐ　明日を考える

3.11 メモリアルコンサート＆報告会・講演会に１２００人

すてきなキルトの前にはたくさんの人が・

3月11日、東日本大震災から丁度１年に市民ホールで「いのちをつなぐ　明日を考える」と題したメモリアルコンサート＆報告会・講演会が開かれました。

主催は避難者や被災地支援を続ける東日本大震災市民支援ネットワーク・札幌（愛称：むすびば」と泊原発の廃炉をめざす会です。1月18日に実行委員会を立ち上げてから、講演会を多くの人に知ってもらおうと奔走することになりました。準備に2ヶ月もなく、たくさんの市民団体への賛同のお願いで回ったり、廃炉の会ニュースにも折り込んだりと実行委員のメンバーは、さまざまな機会をとらえてチケットを買ってもらう努力をしました。

講演する佐野眞一さん

14:46 犠牲者を悼んで黙祷

特に「津波と原発」を書いた佐野眞一さんの講演は、テレビ出演をキャンセルしてもらったいきさつもあり、なんとしても成功させなくてはと奮闘しました。会計総括のＯさんからは何度電話をもらったことでしょう。「まだ600なのよ。もう少し頑張らなくては厳しいのよ」と言われると、私も「メールで奮起を促します！」とか「ご近所の方に声をかけるわ」と赤字にはできないという必死な思いで頑張りました。迎えた当日、地元新聞に載せて頂いた効果もあり、脱原発のデモ行進に参加した人たちも続々と詰めかけ、佐野眞一さんの講演時には1200人を超えていました。会場総括の私はほとんど講演もコンサートも聴けなかったですが、佐野さんの「津波と原発」は事前に読んでいました。作家らしい表現をされていたのが印象的でした。三陸沿岸や福島県内を取材した時、「あばら骨が浮き出た死体のそばで、肩で息をしていた牛。豚が折り重なるように死んでいた」。「満開の桜が咲き誇る誰もいない人里はまるで核戦争後のゴーストタウンのようだ」と。その異様な情景が目に浮かぶようでした。

森のいのちの映像をバックに演奏

佐野さんはひとりひとりが3.11を反芻すること。そうすることで少しずつでも光が見えてくると結びました。

佐野さんは東京にすぐに戻らなくてはならないため、ほんの短い時間でしたが、サイン会もあり、私もその日に買った「あんぽん」にサインをして貰いました。被災者に思いを寄せたキルトの前で佐野さんは感動されていたそうです。

躍動的なアイヌ・アートプロジェクトの演奏

あらひろこさんのカンテレ、嵯峨治彦さんの馬頭琴と西アフリカの太鼓のジンベクラブと小寺さんの「森のいのち」の映像のコラボレーションが素敵でした。アイヌ・アートプロジェクトや、下山武徳さんの迫力のある弾き語り。多彩なゲストでコンサートも盛り上がり閉会となりました。

私ははむすびばの人たちが被災者さん達と一緒に涙を流しながら歩んできた１年間を知り、思いを共有できたことが嬉しかったです。共催したことでと新しい仲間と出会え感動を分かちあえたことに感謝しています。

廃炉の会の展示物を作成したメンバーです。

展示・佐野さん講演・黙祷写真：樫本善太さん
演奏写真：高倉祐一さん

みな子の山旅日記

講師養成講座を修了しました

第17回北海道雪崩講習会

2月26～27日にルスツリゾート周辺で実習講習会が行われ旭岳、中山峠での講習も含めて全課程を終えました。基本クラスはバックカントリー3班、登山コース3班、スノーシューコース1班の7つの班に分かれて講師・補助講師（講師養成クラス受講生）の指導の元、積雪安定性評価やプローブ・ビーコン操作、コンパニオンレスキュー訓練などのカリキュラムを２日間をかけて行いました。私も補助講師として初級の方たちを指導もしました。2日目は中級クラスの5人に補助講師4人（私たち）が加わり、コンパニオンレスキューの訓練でした。あらかじめ役割を決めます。リーダー、韋駄天（いち早くデブリのある埋没地点に走る役割）、ビーコン係、プローブ・シャベル係、連絡係です。１人は半埋没、２人完全埋没の設定。仮想の雪崩現場に全速力で走ってかけつける。ビーコン捜索した所をプローブ１回で命中したのが嬉しかったです。みつかった場所でシャベリングは体力勝負です。講師養成講座2年目で私はたったひとりの女性でした。体力では男性には負けます。エネルギーを使い果たすほど、必死に救助し呼吸を確保し、全身の状況を確認し（人形を使っての実施）安全地帯まで運び出しました。15分以内に救出です。初級コース、講師陣50人が見ている中での実施でした。救助を終えるとギャラリーから拍手が送られました。

初級から中級、講師養成講座2年。4年の歳月をかけてようやく晴れて講師になりました。（写真：仲間と力を合わせて救出中のみな子）

受講生の持参した雪崩エアバックの実演も行われました。雪崩回避に有効な道具です。もっと安くなれば需要は増えると思いました。

山旅日記というには藻岩山は小さな山ですが、「山っていいなぁ。楽しいな」と新鮮な気持ちを取り戻せた山でした。当分忙しくて大きな山には登れませんが、どうぞ気楽にお誘いください。時間を見つけて登りたいです。

低山も楽し藻岩山

3月17日、3人で藻岩山にスキー場側から登りました。10時登山口を出発。結構きつい急登。私がトップを歩きます。ペースメーカーの役割です。「みな子さ～ん、もう少しゆっくり」などと言われながら楽しく登りました。私にとっても心のリハビリになり、１ヶ月ぶりの登山を楽しみました。山はいいですね～。空気が美味しいです。風はまだまだ冷たかったですが、急登を登り切ると８合目からは、札幌市街が眼下に広がり、自分の悩みがとてもちっぽけに思えました。

脱原発・岩内集会に参加して

3月24日、泊原発1,2号機の再稼働を許さない岩内集会とデモに参加してきました。主催は「さようなら原発１０００万人アクション北海道」実行委員会です。

呼びかけ人のひとりである小野有五さんが、リーフレットを手に「福島第１原発と福島市との距離は、泊原発と札幌市とほぼ同じ。西に位置する泊原発が事故になれば、汚染は全道に広がります」。私たちは何度も聞いてはいますが地元で訴えることの重みを実感しました。福島県農民連会長のお話も、我が身の被災体験が胸に迫りました。20ｋｍ圏内だけが避難命令がでて30ｋｍ圏内は自主避難。国はただちに健康被害はないと言い続けたこと。酪農農家は、泣きながら絞った牛乳の全てを廃棄したなど。悔しさと憤りを語り、「農業と原発は全く相容れない」と訴えました。

札幌を出発するとき4台の大型バスが出ましたが、私が乗ったバスは25人だけ。こんな少なくて大丈夫なの？と心配しましたが会場には全道各地から1500人が集まり、すごい熱気でした。斉藤武一さんの紙芝居は泊原発が地域を破壊したことを訴えました。どの人のお話も、原発は自然も社会も人間関係も壊してしまうことがそれぞれの言葉で語られ、とても良かったです。

集会後、岩内漁港から街の中心部にかけてデモ行進。原発止めようのシュプレヒコールが街中に響きました。長い長い隊列でした。

撮影：油谷良清さん

参 BooKs

オオカミの護符

小倉美恵子著　新潮社1500円＋税

絶滅したとされるニホンオオカミに興味を覚えて手にしたのが本書です。神奈川県川崎市は都心からは30分の近さですが、半世紀前は50戸ほどの農村でした。その農家に育った著者は、なぜ土蔵の扉にオオカミの護符が貼ってあるあるのか不思議でならなかったそうです。著者は、その謎を解明するために武蔵国の奥山に分け入って行きます。民俗学者ではないのに足元の歴史を掘り起こしたノンフイクションに引き込まれました。

私の祖父母も農家でした。日高の山奥の大きな一軒家でした。幼い頃、祖父が毎朝、神棚に柏手を打って祈っていた姿が記憶の底にあります。特定の宗教というよりは、太陽に感謝し、今日の農作業が無事に行えますようにと祈っていたように思います。馬や豚、鶏も飼っていましたので、家畜を守る意味も含まれていたかも知れません。

オオカミは、作物を荒らすイノシシや鹿を退治する益獣として山の神として崇められ、聖なる山へ参る「講」という集団があることを著者は探り当てます。お札は奥多摩の御岳山にある神社からもたらされていました。江戸時代から一年の無事と豊作を願って、神社に詣でる「御嶽講」は土橋の農家では今も続いていると言います。オオカミの護符を配る人たちが「御師（おし）」と言われる人々であることを知ります。水や作物などの生命の源を育む山と、農民との深い関わりを示す慣習に出会う著者の驚きと感動が伝わってきます。

私は特に「神々の山へ」の項が好きです。奥秩父の三峰集落でお百姓をしている人の言葉です。「何々山ではなくて、お山。・・・毎日お世話になっているお山。自然に崇めるような気持ちの言葉がお山だと思いますね」と目を細め、武骨な手を合わせ山々を拝んだ。・・・　「山の世界」、すなわち自分たちを生かしめてくれる「命の根源」そのものへの思いがこもっている。・・・・この言葉に、この姿に出会いたくて私は旅に出たのだ！と結んでいます。

著者が足元の生活史を丹念に掘り起こした記録はドキュメンタリー映画にもなっています。是非、観たいと思いました。

100歳まで生きた祖母は記憶力の素晴らしい人でした。淡路島から開拓農民として北海道に渡った祖父母の人生も聴いてみたかったとこの本を読んで思いました。

レベル７
福島原発事故、隠された真実

東京新聞原発事故取材班　幻冬舎
1500円＋税

本書は東京新聞の連載「レベル７」に加筆再編集したものです。福島第一原発の「一週間、汚染水との闘い、想定外の分岐点、国策推進の陰で、安全神話の源流、Ｘ年廃炉」の６部構成。

特に一週間に起きた事実の検証は圧巻です。貴重な記録として今後も役立つ本です。

スピーディの予測データ公開が遅れたり、安全性を強調した後で爆発が起きたりして、政府は信用を失いました。

原子炉は「運良く」制御棒が入り自動停止したものの、全電源喪失などで中央制御室は真っ暗。計器類も全て滅灯し原子炉の水位も温度も分からなくなったという。残された運転員は死も覚悟したのではないでしょうか？原子炉の冷却が不能になり原子炉の圧力が上がっていく。12日には隣の2基にも危険が迫り、1号機が爆発しました。テレビでその爆発映像が報道されました。その時、東電からの情報がほとんどない中で、枝野官房長官が記者会見に臨んだことも明らかにされています。しかし、爆発事故で作業員2人が行方不明であったことや、5人の作業員が負傷したことは報じられなかったことを、本書で初めて知りました。

国が128億円も投じた放射能拡散予測装置の「スピーディー」の情報は公開されず、放射能汚染地域に多くの市民が避難することになったのです。しかも後から、スピーディーの情報を米政府は知っていたことが明らかになりました。政府は救援に来る米兵の命を優先し、国民の生命を守らなかったことに怒りを覚えました。その後3号機、4号機が爆発。原発から63キロ離れた福島市内でも放射能は普段の500倍を示したにもかかわらず、政府は「健康には影響がない」と言い続けたのです。

第二部「汚染水との闘い」ではその危険性と苦難が報告され、第四部「国策推進の陰で」と五部の「安全神話の源流」には国策として進められた、原子力関連施設の立地の裏側で行われた地元工作を発掘しています。第六部「Ｘ年の廃炉」で、融けた核燃料が実際にどうなっているかも確かめることができないこと。大型原発の一万分の一の出力しかない研究用原子炉がいまだに廃炉はかなわず、住民の不安材料であり続けている現実をリポートしています。

これほどの大事故を経験しながら、各地の原発再稼働をしようとする電力会社と政府。次世代に負の財産を押しつけてはならないと強く思いました。原発を廃炉にするのは、大人の責任です。是非多くの人に読んでもらいたい１冊です。

あんぽん孫正義伝

佐野眞一著　小学館　1600円

本書はソフトバンク社長の孫正義さんの評伝です。

在日3世の孫さんは、日本名で安本と名乗っていました。「あんぽん」とは安本から取られたもので、本人は非常に嫌っていました。自分の半生に対する侮蔑の言葉だったからです。佐賀県鳥栖市に生まれた孫さんの生い立ちは異色です。極貧の中で、鼻が曲がるような異臭漂う家で、豚と一緒に寝起きしたとか、在日であることで差別され、頭に石をぶつけられたこと。その傷は今は残っています。父、三義さんは密造酒を作って売りさばいた話など壮絶な逸話に圧倒されます。父は商売の才に長け、パチンコ店で大成功を収めます。成功して家族の住まいが変わっても、孫さんの原点は貧しい朝鮮部落のバラック小屋でした。たびたびその小屋に家族で集まっては、茶碗を箸でたたきながら歌った「アリラン」や「トラジ」だったと孫さんは懐かしそうに語るのです。大豪邸とバラック小屋のアンバランスが面白いですね。

東大を狙えるほど孫さんは優秀でしたが、在日では教師にもなれないと、久留米の名門高校を中退してアメリカに渡り教育を受けます。アメリカの大学で知り合った日本女性と結婚。孫さんは1990年に帰化しますが、韓国人としての姓を名乗ることを選びました。親戚中が猛反対。ただひとり理解してくれたのは父でした。顔も似ていますが、一本気な性格は父親譲りのようです。脱線しますが、佐野さんは三義さんのなんとも豪放な気性が嫌いではない。

佐野さんは、孫さんの唱えるＩＴ革命には批判的です。30年後には紙の新聞も本も無くなるという孫さんに「技術の進歩のみを追い求めるばかりに、その背後にあるはずの歴史に思いを馳せることを怠っている。それは人類にとって大切な過去を奪い去るだけでなく、本当の未来を見失うことにつながる愚行だ」と。私も同感です。通信を発行する者としても、活字は大事にしたいです。

この本の面白さは、一代で成し遂げたＩＴ産業の成功者としての孫正義ではなく、在日としての苦い歴史を掘り起こしているところにあります。

被災地に100億円の私財を寄付したことが話題になりましたが、福島原発の事故に衝撃を受けた孫さんは、再生可能エネルギーへの転換を求める脱原発の活動を開始します。10億という私財を投じてそのための財団を発足させました。その心意気に感動しました。何故そこまで打ち込むのか？佐野さんは、孫さんのルーツを取材しています。孫さんの母方の叔父が炭坑のガス爆発事故で亡くなっています。それだけでなく、孫さんの家系は、朝鮮から炭坑労働者として日本に送り込まれ、辛酸を味わったことを明らかにしています。

「佐野さんの取材力はすごい」と孫さんに言わしめたほど。等身大の孫正義が圧巻。お勧めです。

福島からあなたへ

武藤類子著　写真　森住卓
大月書店　1200円＋税

4.1 講演する武藤類子さん

「私たちはいま、静かに怒りを燃やす東北の鬼です」と昨年「9.19さようなら原発5万人集会」で感動を呼んだ武藤類子さんのスピーチが本になりました。

4月1日に札幌でも講演会があり参加しました。

福島県三春町に住む武藤さんは、福島原発の事故後、家族で山形に避難。1ヶ月間、知人宅に身を寄せましたが帰宅。戻ってくると胸が痛くなるような現実が待っていました。国が行ったのは情報を隠すこと。事故を小さくく見せること。さまざまな基準値を引き上げることでした。情報が隠されたために放射能が高い所に逃げた人も多かったと語りました。

9.19のスピーチで「私たち福島県民は、故郷を離れる者も、福島の地にとどまり生きる者も、苦悩と責任と希望をわかちあい、支えあって生きていこうと思っています。私たちとちながってください。・・・・原発をなお進めようとする力が、垂直にそびえる壁ならば、限りなく横に広がり、つながりつづけていくことが、私たちの力です」と訴えました。地に足をつけて脱原発と言い続けてきた人の言葉だなと思いました。自分の暮らしを見つめ直す取り組みを実践されていることを、本書と講演で知りました。雑木林を切り開き小屋を建て、ソーラーパネルで電気を賄い、薪ストーブでドングリを煮てアクを取り、ドングリカレーに。山の中の小さな喫茶店「燦」でのシンプルな暮らしの紹介がいいです。

子どもの頃、おもちゃなんて何もなかったけれど工夫して遊んだ日をふと思い出しました。毛虫までもが愛らしく、不思議そうに見つめる犬の表情とのユーモラスな写真は連れ合いの佐藤真弥さんが撮影しています。

武藤さんらは、霞ヶ関の経済産業省前で「原発いらない福島の女たち100人の座り込み」を行いました。武藤さんの呼びかけです。「ようこそ勇気ある女たち。遠くから、近くから、自分の時間とエネルギーとお金を割いて集まってくれた一人ひとりにありがとう。女たちの限りなく深い愛、聡明な思考、非暴力の力強さが新しい世界を作っていくよ！ともに座り、語り、歌いましょう！」そんな自分に私もなりたいです。

武藤さんのメッセージを繰り返し読み、私も原発に怒りを燃やし続けます。

サラの鍵

フランス　ジル・バケ＝プレネール監督

169号で紹介した「黄色い星の子供たち」でも描かれたヴェルディブ（冬期競輪場）事件を基にした映画です。

10歳の少女サラが辿る過酷な運命と、60年後に真実を明らかにすることで、自分の人生を見つめ直す雑誌記者ジュリアを交錯させて物語が進行します。

1942年、ナチス占領下のパリで行われた一斉検挙の朝、サラはとっさの機転で、弟を納戸に隠し、鍵をかけます。すぐに帰宅できると思っていたのに、母親とサラは離ればなれになり、収容所に送られます。命がけでユダヤ人を救った人々もいました。鉄格子からサラ達を逃がした守衛や、危険を冒してまでサラを匿った老夫婦などに、良心に従った勇気に胸が熱くなりました。果たして、サラは弟を助ける事が出来たのか？ジュリアは、サラの足跡を辿ります。次々と明かされて行く謎に引き込まれました。

ジュリアの人生にも転機が訪れます。すでに14歳の娘がいますが妊娠し、ジュリアは胸を躍らせますが夫は望まないと言います。ジュリアの人生を変えたのは、サラの痛切な悲しみを全身で受け止めた時でした。人間のいのちが時を超えてつながっていることに深く感銘しました。

ジュリアを演じた女優はクリスティン・スコット＝トーマス。内省的で、凛とした演技が印象的でした。

ユダヤ人迫害の歴史を、ドイツやフランスでは、さまざまな切り口で語り継いでいることに、いつも勇気づけられます。日本映画も、もっと戦争の真実を伝えて欲しいです。

イエローケーキ
クリーンエネルギーという嘘

ドイツ　ヨアヒム・テルナー監督

原発の燃料として使われるウランの採掘の裏側を描くドキュメンタリー。

ウランの鉱石採掘の段階で、処理不可能な放射性物質が大量に発生している事実を世界各地のウラン採掘現場を5年にわたって取材し、明らかにしました。イエローケーキとは原発の燃料になる黄色い粉末を指します。

原発産業の大企業は、現場の撮影や録音は許可しません。隠しカメラや飛行機をチャーターして撮影を敢行した貴重な映像です。採掘の現場だった所がどうなっているかを丹念に追いかけています。核のゴミはいったいどうなるのか？それでも原発を稼働し続けるのか？とこの映画を見て背筋が寒くなりました。危険がいっぱいのウラン採掘。ウランが人と自然にもたらすものの実態を多くの人に知ってもらいたいです。

チェルノブイリハート

アメリカ　マリアン・デレオ監督

チエルノブイリ事故から26年。昨年3.11に福島原発事故が起こり、再び原発の怖さを実感しました。

このドキュメンタリーは、マリアン監督が事故16年後にベラルーシを訪問。99パーセントが被曝し「ホットゾーン」という局所的な高濃度汚染地域が100ヶ所以上も点在するが、その村に住み続ける住民たち。病院、孤児施設、学校と訪れ、被曝の次世代にもたらす被害をカメラがとらえます。

チェルノブイリの人々は広島の原爆の90倍の放射能にさらされました。ベラルーシで生まれる健康な赤ちゃんは15～20パーセントだけだといいます。聞き間違いかと思ったほどです。映像は、さまざまな奇形や障害を持った赤ちゃんや子供たちが映し出されます。とても福島の人たちは正視できないのではと思いました。チェルノブイリハートというのは、生まれながらに穴が空いた心臓のことです。放射線障害は奇形にとどまりません。事故の前後に生まれた子供たちの甲状腺がんの発生率は30～40パーセントにものぼるといいます。

今、福島でも心配されていますが、原発労働者の被害の大きさに息をのみました。本「チェルノブイリの祈り」でもその悲惨さを遺族の証言で知りましたが、チェルノブイリ事故では60万人の事故処理作業者が徴収され、大量の放射能にさらされ、事故以来13000人の作業者が亡くなったことはあまり知られていないのではないでしょうか？事実は何よりも重いです。

ものすごくうるさくて、ありえないほど近い

アメリカ　スティーブン・ダルドリー監督

9.11アメリカ同時多発テロで親を失った子どもは3000人に及んだそうです。

あの日から１年たっても11歳のオスカーは父の死を受け入れることができません。父のクローゼットから１本の鍵を見つけたオスカーは、入っていた封筒のブラックという名が何かのメッセージだと考えます。472人のブラックさん全てを訪ねる計画を立てて実行します。父を求めるように、ニューヨーク中のブラックさん探しが始まります。オスカーはさまざまな人たちと出会い、交流し、思いがけない経験もします。

この不思議な題名は、オスカーの性格や事情を暗示しているようです。オスカーは聡明だけど、エキセントリックで、社会適応能力で問題を抱えていました。父は息子の将来を案じ、調査探検ゲームを考案したのです。オスカーの演技が素晴らしいです。姿は少年なのに、考えること、行動がとても11歳とは思えなかったです。オスカーの行動と感情の動きに私もそっと寄り添って応援したい気持ちになりました。「ママはどうしているの？」という疑問はラストに明かされます。

ものすごい仕掛けがあるわけではありませんが、少年の再生物語として秀作でした。監督は「リトル・ダンサー」や「愛を読む人」のスティーブン・ダルドリー。

普通の生活

吉田泰三インタビュー・撮影監督

3.11後の福島県に暮らす人々の声を集めたドキュメンタリーです。

昨年4、5、9 月に郡山市や福島市などでボランティアをしながら、避難所にいる人たちや、ＦＭパーソナリティー、小さな子供を育てるお母さんがインタビューに答えます。子ども達は夏でもマスクに長袖で通学している様子が映し出されます。

幼稚園に通う子どもに「僕はいつまで生きられるの？」と聞かれた母、放射能が心配で洗濯物も外に干せず、水の汚染が心配で無洗米を炊いているという人など。幼稚園の園長は「子どもたちの健全な成長が奪われている」と訴えます。

放射線から家族を守るための闘いを常に強いられているのが、普通の生活になっている悲しさが浮かび上がります。外遊びも出来ない状況はとても普通ではありません。転校すべきか、残るべきか悩む中学生の親も語っていました。自分だけが避難していいのかと息子は決断できずにいました。

福島に思いを寄せ続けること。忘れないでいること。札幌への避難の呼びかけも大事なことですね。被災者受け入れで奮闘しているむすびばの活動の大切さを改めて感じました。ドキュメンタリーに使われた音楽がとても良かったです。嵯峨治彦さんの馬頭琴が静かに心に響きました。

3月ニセコのスキー場で
明るい春の空でした。

2～3月は3,11講演会＆コンサートの準備に明け暮れました。3月予定の銀河通信の発行が遅れました。編集していて、忙しい時間の合間に、映画も観て本も読んでいたことに気づきました。いつも編集のたびに思うことですが書きとめておくことの大事さです。せっかく読んだ本も忘れていくのです。そんな訳で、もう一度本を引っ張り出したり、映画のチラシを読み返したりして、記憶を辿る作業でした。4月は新学期、入学、卒業した人は社会人と出発の季節ですね。夫は最後の転勤があるかも知れないと3月は落ち着かない日々でしたが残れることになりホッとしています。今日から新学期が始まりました。昨年の今頃は父の病院通いでした。もうすぐ父の一周忌。最近になって、父が言っていたことを思い出します。自分の好きなように生きよと。私も廃炉の会が落ち着いたら山登りを再開したいなと思っています。拙い通信ですが読んで頂けたら嬉しいです。（みな子）

自然守るために奔走

北の山ガール 9

「泊廃炉めざす会」事務局長 樋口みな子さん

「原発よりも命が大事」

横断幕を掲げる市民らが昨年11月11日、札幌地裁前に集まった。北海道電力泊原発の廃炉を求めて提訴した集団訴訟。最前列に、江別市の主婦樋口みな子さん(62)の姿があった。訴訟を支援する「泊原発の廃炉をめざす会」の事務局長だ。

「事故が起きれば制御できない。未来に生きる子どもたちのために、日本中の原発をなくしたい」

樋口さんのライフワークは自然保護だ。高山植物の盗掘問題や登山者のトイレ問題にも取り組む。

道内50の自然保護団体が1998年、高山植物の盗掘防止のために結成したネットワークには、当初から関わってきた。当時、夕張岳やアポイ岳など貴重な固有種が咲く山で、愛好家による盗掘が相次いでいた。それぞれの山で対策に取り組む地元の団体が、全道的に動こうと手を取り合った。

あちこちの山へ足を運び、侵入防止柵を立て、登山者には保護を呼びかけるチラシを配った。効果があってか被害が減った時にはやりがいを感じた。

山に登るようになったのは35年近く前。旭川市に住んでいた時、地元の市民団体「旭川大雪の自然を守る会」と出会ったことがきっかけだ。仲間と大雪山系の山々を歩くようになり、魅せられた。頂上に立った時のすがすがしさ、自然の雄大さ……。そして、厳しい環境で花を咲かせる高山植物や、氷河期をへて今なお生存するナキウサギの姿。

「大切にしなければならない」。そんな気持ちがふつふつと湧いた。

保護活動などで事務局に加わると、様々な作業に追われて肝心の山に行けないこともある。でも、そんな時は「今はもうひとつの山に登っているんだ、と自分を奮い立たせます」。

(籏田紗苗)

樋口みな子さん。忙しいときでも、週に1度ほどは自宅近くの野幌森林公園を歩く＝江別市

山が好きなだけの普通の人です！

たくさんの励ましのメールありがとうございました。原発に対する反響は東京の人が多かったのが意外でした。

購読料をありがとうございます（敬称略）1.28～3.31

市根井孝悦（函館市）太田肇・朋子（鎌倉市）藤重千秋（斜里町）カンパ含む　堀田眞知子（札幌市）関口興洋（北九州市）高畠拓生（嘉麻市）カンパ含む　及川文（札幌市）佐々木睦子（横浜市）切手

合計22,000円は印刷・送料に使わせて頂きます。ありがとうございました。だんだん振込が少なくなると今回は出せるかしらと心配しましたが、思いがけないカンパに助けられて読者の購読料だけでずっと発行することが出来ました。郵送希望の150人から1000円を振り込みいただくと丁度1年間は発行できます。よろしくご協力お願い致します。